

# 長岡市（新潟県）

素材研究  
(国内)



平成の大合併で寺泊も長岡市となり、新たに誕生した海岸線は豊富な海の幸も観光資源に加えることになりました



## 「日本一の大花火」軸に通年型観光めざす ユニークな日本酒乾杯条例で酒処をアピール



大宮次長を囲む長岡観光コンベンション協会観光・物産振興課の小林隆課長代理(左)と長岡市商工部観光企画課の佐藤泰輔主任(右)



無形文化財の「小国和紙」の工房では紙漉き体験もできます



“酒処=長岡”を象徴する市内酒蔵の銘酒



山古志の闘牛は千年の歴史を受け継いだ郷土の誇りです

中越大震災の復興祈願で誕生した「フェニックス」。信濃川の河川敷で幅2キロにわたって打ち上げられ、視界一杯に広がる超大型花火は心震わさずにはおきません

「日本一の大花火」で知られる新潟県長岡市。花火を軸にしつつ、合併で広がった地域の観光資源や観光素材を活用して通年観光の拡充を目指そうと、長岡観光コンベンション協会への旅行業界からの出向スタッフが健闘しています。

### 周遊バスで広域観光と二次交通を実現

長岡市では11月1日から24日までの土日と祝日に「秋の観光周遊バス『てんこもり号』」が運行されています。市内の蓬平温泉と長岡駅前を起点に、フリーパスで1日乗り放題・乗り降り自由。ガイドによる車内での観光案内付で、大人500円という格安の料金設定です。6年前にスタートした市内周遊バスは、昨年からは季節ごとにコースを変えるなどリニューアルしたのに続き、今年7月から8月にかけて「中越大震災復興10年/夏の特別便」も運行するなど、内容の拡充も図られました。

平成の大合併で広がった地域の観光地を紹介すると同時に、長岡駅からの二次交通問題を解消する目的で運行を開始した周遊バスについて、長岡観光コンベンション協会の大宮茂樹事務局次長は、「初年度の延べ約1600人から2年目には500人ほどに減少したが、料金の値下げやガイドに

よる車内観光案内などのテコ入れで、利用者数も増加してきている」と説明。乗車人数の40～50%は市内、20～30%が県内という割合から「今後は県外の利用者拡大も図っていく」（大宮次長方針）です。

### 旅行会社も地域経済活性化に貢献

今年7月、長岡市に全国でも珍しい「日本酒で乾杯を推進する条例」が誕生しました。長岡市には市町村としては第2位という17の酒蔵があり、日本酒は伝統産業の一つ。条例は、「乾杯の習慣を広めることにより」「世界へ長岡の酒の普及を図り、伝統文化への理解の促進に寄与する」と謳っています。

今年10月には、市内の飲食店約30店舗が参加して「越後長岡美酒めぐり」を開催。1500円のチケットで、お猪口6杯の地酒とつまみ2品が楽しめるイベントを通じて、長岡の日本酒をアピールしました。

長岡市では、毎年8月の長岡まつり大花火大会が、2日間であらゆる全国から100万人規模の観光客を集める人気を誇ります。その花火人気を軸に市内各地の観光資源や観光素材を活用し、年間を通じて観光客の入込拡大を図ることも大きな課題です。

JTB関東から出向して3年目という大宮次長は、「地域への側面支援を行いながら、地元にもチベーションを高めてもらい、誘客拡大を通じた地域経済活性化に貢献したい」と語っています。